

## 日本天文学会 早川幸男基金による渡航報告書 *Groups of Galaxies in the nearby Universe*

渡航先—チリ

期 間—2005年12月4日-10日

30時間に及ぶフライトを経て、くたくたになった私はチリのサンチアゴ空港に降り立った。空港には世界各地からの天文学者がすでに集っており、私は見慣れない空港に右往左往する間もなく送迎のシャトルに押し込められ、会場のホテルまで連行された。ESO主催の研究会，“Groups of galaxies in the nearby Universe”の幕開けである。

過去に何度か国際研究会には参加したが、全く知り合いのいない研究会は今回が初めてであった。日本人はもちろん私一人で、緊張して会議初日に臨んだが、そんな不安は最初のコーヒーブレイクで消し飛んだ。会議の参加者が私のことを実によく知っているのである。「君の論文は読んだよ」「君がああ論文の著者か」と次々に挨拶され度肝を抜かれる思いであった。自分自身も、昼食や夕食を共にした参加者の名札を見ていると聞いたことのあるような名前の人が多いことに驚いた。よくよく思い出してみるといずれも自分が論文で引用したり、引用されたりした論文の著者らであった。論文でしか名前を聞いたことのない研究者に、第3国で初めて会って、初対面ながらまるで昔からお互いのことを知っていたかのように交流を深められる。これは非常に奇妙な国際交流体験であり、また同時にたいへんうれしい経験でもあった。日頃研究生活でのさまざまな苦労も報われる思いである。

一方で、これほど知り合いが多くいたことは、研究会が私の専門分野にテーマを特化したものであったことの裏返しでもある。主催のESOの皆様、ならびに私の渡航を援助して下さった、日本天文学会早川幸男基金に深く感謝したい。

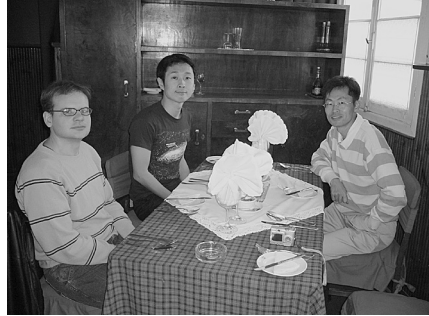


図1 会議中の食事風景. 左より Dr. Chris Conselice, 筆者, Dr. Sang-Chul Kim.

初日にあった私の口頭発表がおおむねうまくいったようであるということが実感されたのは2日目以降であった。発表者が次々と私の発表内容を引用して下さったからである。特に、著名な理論家の方が私の結果を引用してくださったり、会議のサマリーで私の結果を取り上げていただいたりしたことはたいへんな名誉であった。また、他の研究者の発表に対して頻繁に質問をぶつけられたのも大きな収穫であった。分野が自分の専門に限られていたため、自身にも少なからぬ予備知識があり、疑問に思ったことをその場で積極的に聞くことができたのは、理解の助けにもなり、また議論の発展につながったことと思う。時に私の質問に聴衆がうなづいているのが実感されるのはまさにこのうえない至福の瞬間であった。

私の脳裏に焼きついて離れないのは、真夏にもかかわらず真っ白な雪をいただいたアンデスの山々である。また次の機会に名前だけしか知らない奇妙な友人たちと再会することを誓って、私はアンデスの山々に別れを告げた。

後藤友嗣 (宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究本部赤外サブミリ波天文学研究系)